

Costume and Textile

No. 3

服飾文化学会会報

2002年3月



夏期セミナー参加の皆さん

第2回夏期セミナーを終えて

新世紀をむかえた本年度夏期セミナーは2001年8月1日より3日まで、会津若松市ワシントンホテルで開催された。

科学技術の発達により効率のよさを私たちにもたらした前世紀は、一方では地球環境破壊がクローズアップされ多くの問題を残した。そのような中、先人の知恵と弛まざる努力により築かれてきた生活文化を今、改めて見直し学ぶことは意義あるものと考え、今セミナーでは広く「生活文化」の観点から、文化財の修復・保存、地場産業に携わる人々の生き方、技術、次世代への技術の伝承等について理解を深めるプログラムとした。

第1日目は別掲のプログラムに示すように、文

化財の修復・保存の分野において第一人者である造形研究所所長本間紀男氏より、特に脱乾漆像の技法についてスライドを用いた貴重な講演をいただいた。さらに福島県昭和村在住の織物作家、酒井美智代氏より修復・復元に用いる素材づくり、シンポジウムでは服飾教育研究の立場から研究された文化財の修理について会員の報告があった。

第2日目は会津地方の伝統ある会津木綿、漆器、民芸品等地場産業に従事されている方々より実物や資料を用いた講演、さらにこれらの工場や工房を見学した。改めて歴史を有する職人技と伝統美が織りなす地場産業の魅力を感じた。また自ら苧や麻を栽培し、いざり機で布を織る酒井氏より会

場で「糸を績む(うむ)」実演があり、目に見えない程の細かさの糸を績む技術に皆、驚嘆した。
酒井氏には会場いっぱい氏の作品を展示いただ

き実際に目で見、手で触れて学ぶことができた。
第3日目は観光バスで、会津柳津の霊巖山園蔵寺、文化功労者故齊藤清の作品を展示する齊藤清

平成13年度夏期セミナープログラム

日 時	内 容
8月1日・水	12:30~13:00 受付
	13:00~13:05 開会の挨拶 服飾文化学会会長 石山 彰氏
	13:10~14:30 講演I「家光公像の修復と復元-350年ぶりの初公開-」 仏教造形研究所所長工学博士 本間 紀男氏
	14:30~14:50 休憩(コーヒーブレイク)
	14:50~17:00 シンポジウム 「まぼろしの脱乾漆像の技法」 本間 紀男氏 「修復・復元に用いる素材」 織物作家 酒井美智代氏 「バックスルドレスの装飾部分の修復」 大妻女子大学 大網美代子氏 「小袖の修理」 女子美術大短大部 岡崎 和美氏
	18:00~20:00 懇親会(夕食) 詩吟、剣舞等郷土芸能紹介
	8月2日・木
9:00~11:00 講演II「会津地方の地場産業について」 1、会津木綿 山田木綿織元代表 山田 悦史氏 2、会津漆工芸 日本文化財漆協会理事 山内 清司氏 3、会津民芸品 いがらし民芸四代目 栗城 榮之氏	
11:15~12:30 講演IIIおよび実演 講演「からむしの布を織る」 実演「糸を績む(うむ)」	
12:30~13:20 昼食(ホテル内 三十三間堂)	
13:30~16:30 会津若松市内見学(一部自由見学) 山田木綿工場、山内漆器工房・ギャラリー、鶴ヶ城、その他市内自由 見学	
18:30~19:30 夕食(各自)	
8月3日・金	7:00~ 朝食(バイキング)
	8:30~16:30 JR郡山駅解散 ホテル出発 → 齊藤清美術館 → 園蔵寺(柳津虚空蔵尊) (8:30) (9:15~10:00) (10:10~10:50) → 昼食(会津市内、そば処和田) → 武家屋敷 → 勝常寺 (11:40~12:30) (12:40~13:40) (14:10~15:00) → JR郡山駅(16時30分解散予定) 郡山駅発 17:25 → 東京駅着 18:52 郡山駅発 17:44 → 東京駅着 19:08



「糸を積む」実演 酒井美智代氏



会津漆工芸講演 山内清司氏

美術館、会津郊外の東北を代表する古刹で、平安初期の仏像が12躰安置されている重要文化財、勝常寺を見学した。暑い中にも時折吹くさわやかな

会津地方の風に心なごむ一日であった。

(夏期セミナー担当 永井房子)

夏期セミナーに参加して

川村短期大学 田中 美智

第1日目の講演とシンポジウムについて

「講演Ⅰ」家光公像の修復と復元—350年ぶりの初公開— 本間 紀男氏

日光輪王寺では、世界遺産指定・家光公350年遠忌を記念する家光公像の初公開を企画し、氏は秘仏の修復と復元を担われ、その概要を多くのスライドを用いて説明された。

《修復》構造的な損傷は軽微であった。表面の汚れ・染みは、埃と杉花粉が長い年月を経て付着した外因性のものであった。無水エタノールにて脂分を溶出させ、紙・布等で吸い取り、彩色を傷めずに汚損の軽減が出来た。

《復元》頭・躰は脱乾漆造りで移し取る工法とした。袍の黒地は松煙膠水で下塗りし、文様は古墨に松煙を混ぜた墨汁で描くこととした。しかし、像表面は曲面であり、各部を少しずつ撮影した文様も変形していた為、復元図作製は困難を極めた。さらに実際の復元像に描き込むことは、至難の技であった。文化財は優れた技術の集積であって、伝統保持の専門家（今回では人形師、高田装束、研

究所スタッフ各位）の存在が不可欠であった。

※「シンポジウム」では、本間、酒井両氏のほか、会員より修復や修理にたずさわられた研究発表があった。

・まぼろしの脱乾漆像の技法 本間 紀男氏
天平彫刻の著名な諸像は、脱乾漆像であるが、造られなくなり幻の技法となった。塑上で概形を造り、その上に5~8枚麻布(紵布)を漆で貼り重ねる。乾固後、窓を開け土を取り蓋をし縫合する。細部を造り、数回錆漆を塗り研ぎし、漆箔や彩色を施し完成する。

・修復・復元に用いる素材 酒井美智代氏
一年周期の自然との共生の中で提供されてきた物が暮らしの変化で消失した。修復・復元の作業には、入手困難な素材がついてまわり、考えも及ばず戸惑うことが多い。また、依頼者自身も求める物について曖昧で、例えば、脱乾漆像に用いる紵布の糸の太さや漆が丁度よくつく織り密度等わからない。

・バックスルドレスの装飾部分の修復 大網美代子氏
本ドレスは某氏修復が原品と異なり、鍋島報効会より再修復を依頼された。作業手順は(1)原品と既修復との比較検討、分析図作成(2)材料の把握、空ビーズの特注(3)空ビーズの編みあげ法、組み方の解析、試作(4)空ビーズの房飾の調整。装飾部分は原品に近く修復され、英国、京都、東京にて出展された。

・小袖の修理 岡崎和美氏
大学教育では唯一とされる日本刺繍を研究・指導され、委託研究事業として東京国立博物館より依頼の小袖(寛文)の修理に当たられた。作業手順は、調査⇨解体⇨材料染色⇨刺繍⇨裏打ち⇨仕立て。刺繍の利点は、損傷箇所合致するステッチがあり、布にふれず極細針で刺す。糸撚り技術で最適糸を選択。

会津地方の地場産業について

福島大学 初澤 敏生

8月2日に実施された「講演II」は「会津地方の地場産業について」と題し、会津地方を代表する木綿・漆工芸・民芸品の生産に携わる第一人者の方々からお話をうかがった。

山田木綿織元代表の山田悦史氏は会津木綿の歴史と現状について紹介された。会津地方では江戸時代初期に木綿栽培の技術が伝えられたが、木綿は南方の作物であるため、繊維が短く太い糸しか生産できなかった。そのため製品も厚地で、主に労働着として用いられた。明治以降は品質のよい輸入綿花に転換されたが、製品は現在も伝統的な先染厚地織物が中心である。製品は一部は土産品に加工されて地元で販売されているが、多くは日本橋の集敷地問屋か、近接する米沢産地の問屋に出荷されている。

日本文化財漆協会理事の山内清司氏はわが国における漆工芸文化と会津の漆器生産の歴史を中心として講演された。会津における漆器生産については、その起源は不明であるが15世紀半ばには生

産が開始され、16世紀初頭にはロクロを用いた木地加工が行われていたことがわかっている。江戸時代にはいると京都から職人を招き、蒔絵を中心とした製品に転換した。これが現在の会津漆器の特徴の基礎を形作っている。

いがらし民芸郷土玩具の栗城榮之氏は赤べこなどの郷土玩具の作成方法について詳しく紹介された。詳しい工程の紹介は割愛するが、ここで注目されるのは和紙生産や漆生産など、他の地場産業に支えられてこの産業が成り立っていることである。生活文化は多くの産業を基礎とすることによって初めて存在できることが示された。

これらの講演を通し、生活文化を支える様々な産業について理解を深めることができた。服飾文化も生活文化の一部であることを考えれば、それを支える様々な産業にも視野を広げていくことが必要である。これからもこのような企画が期待される。

からむしの布を織る・糸を績む(うむ)

和歌山信愛女子短期大学 中田 尚子

昭和村の苧(からむし)生産は、国から選定保存技術に指定されている。越後上布を織るために原料の昭和村の苧を無くしてはならないということである。

良質の原麻を得るために村の栽培者は大変な努

力をした。畑の手入れが悪いとすぐ野生化し、野からむしになってしまい、からむしにはもどらない。5月下旬に焼き畑をしてから7月の刈り取り、浸水、皮はぎ、苧引きとたくさんの行程があるが、この苧引きの時期がむずかしく、土用をすぎると

いい繊維が出来ない。この引き方がむずかしく、昔、仲買りがいた頃は、この技術に対してきびしかったが、今はひく技術が落ちたそうである。

酒井氏は上布の技術を体得され、この着尺を身近にあった会津木綿の縞柄に織っていらっしや

る。酒井氏に「糸を績む」実演をしていただき、目の前で見ていただくことで、糸を績むという仕事がどういう仕事か、知ることが出来て、皆、感激でいっぱいであった。

見学会

山野美容芸術短期大学 澤村 英子

見学会は会津若松市の郊外柳津（やないづ）地方を中心に行われた。

会津柳津は、美しい木々の緑を水面に映す只見川に沿って広がる門前町である。その柳津町の名誉町民であり、世界的な版画家で文化功労者でもある故斉藤清氏の作品を展示する「やないづ町立斉藤清美術館」での作品の数々は、私の心をなごませてくれる“いやし”そのものであった。

故郷の会津を愛した氏の作品は、会津の冬景色が多くこんもりと積もった雪が民家を包み、寒さや厳しさよりも温かさ優しさにあふれた作品であった。美術館内部も、ホッとひと息つけるような心なごむ木のぬくもりを感じる建物で、窓からは氏がスケッチした風景がそのまま眼前に広がっていた。

こんなに緑の美しい自然の中に、文化と歴史が

交差し合い沢山の見どころを秘めた町“柳津”へ、今度は学生を連れてゼミ旅行に来たいと思った。

3日間のセミナーは充実した内容で、企画して下さいました先生方に厚く御礼申し上げます。



山田会津木綿工場見学

第3回論文発表会を終えて

第3回服飾文化学会論文発表会は、平成14年3月9日(土)、14時25分より、大妻女子大学(千代田区三番町)にて開催された。参加校10校からの卒業論文9件、修士論文4件、併せて13件の発表が会場一杯の参加者を迎えて行われた。論文題目は次の通り。

卒業論文

- ・古代ギリシア古典時代の服飾と美意識
 笹井 理恵 (日本女子大学)
- ・婦人乗馬服が現代ファッションに与えた影響
 高橋 由紀 (大妻女子大学)
- ・女らしさの表現—1920年代を中心として—

森下 則子 (実践女子大学)

- ・「VOGUE」にみるダイエット広告
 武藤 藍 (文化女子大学)
- ・雑誌『少女の友』におけるしぐさについて
 永田麻里子 (共立女子大学)
- ・宮沢賢治『銀河鉄道の夜』における色彩語
 田上 晋子 (杉野女子大学)
- ・トロンプレイユ—デニムのドレスによる—
 水上 路美 (和洋女子大学)
- ・服色—葡萄色を中心に—
 菊池 知香 (学習院女子大学)
- ・江戸期飾り櫛のデザインとその特質

— 雛形本と浮世絵を中心として —

栗田佳世子 (昭和女子大学)

修士論文

・染織品上の赤

— 紫染料の高速液体クロマトグラフィーによる同定

笠作 奈樹 (共立女子大学家政学研究科)

・モード誌からみる 1830 年代初頭の服飾表現と造形要素

大澤香奈子 (京都女子大学家政学研究科)

・江戸後期の嗜好「いき」の解釈

吉井菜穂子 (文化女子大学家政学研究科)

・ビルマ (現ミャンマー) 伝来の更紗掛布

— その修理と図様をめぐって —

須藤 良子 (日本女子大学家政学研究科)

発表終了後、懇親会が大妻女子大学アトリウムで開かれた。軽食を囲んで参加者一同は情報交換をしながら和やかに親睦を深め合った。

年々内容の充実が見られ、今後の学会員の層の活躍が期待される。

(論文発表会担当 鷹司繪子)

第 2 回研究例会を終えて

服飾文化学会第 2 回研究例会は、2001 年 11 月 24 日 (土) 杉野女子大学において開催された。

講演 「ウィリアム・モリスのテキスタイル」

小野 悦子氏 (明治大学講師)

見学 I 企画展「ウィリアム・モリスの部屋」

於・杉野衣裳博物館

見学 II 企画展「杉野芳子 — モードの遺産展 —」

於・杉野記念館

講演者の小野悦子氏は、ウィリアム・モリス研究者として著名な方である。杉野衣裳博物館では、同氏より貴重なモリス・テキスタイルを出品していただき企画展を開催中であつたので、それに合わせて学会のために特別に講演をお願いした。

講演では、ヴィクトリア朝の時代背景から説きおこされ、ウィリアム・モリスの全生涯の業績の意義について分かり易く説明して下さつた。

博物館に移動してからは、御自身のコレクションについて一点一点丁寧な解説があつた。実際にご自宅で永年カーテン地として使用されていたという有名なプリント地「ウィロー」が、全く色褪せていないのを見て参加者は驚きの声をあげていた。コレクター自らの解説でモリスのテキスタイルを鑑賞できるという、またとない機会を持つことができた。小野悦子先生本当にありがとうございました。

最後に、タイムリーに開催されていた杉野芳子



「ウィリアム・モリスの部屋」展 小野悦子氏を囲んで



小野悦子氏講演「ウィリアム・モリスのテキスタイル」

展を見学して、ドレメ 80 年の歴史を振り返って散会。当日の参加者 43 名。落葉の舞う中、モリスに思いを馳せながら帰路についた。

(研究例会担当 塚田耕一)

*****会員からのおたより*****

刺し子「徳永幾久コレクション」展

山形の東北芸術工科大学ギャラリーにおいて、2001年6月6日から19日の間に、徳永幾久氏が畢生の刺し子コレクションの内、120点が展示された。長着・ドンザ・半天・産着、その他足袋や手甲・脚絆など様々な分野に及んでいる。中には松前船によるアイヌとの交易からの渡米品と思われたものが、その模様を応用して刺されたものと言う解説で、深い文化交流のあとを知った。

また徳永氏が数々の賞を受けられた内、代表的功労と称えられる“生命の木模様発見”の実物を目にすることが出来た。絵画的な立ち木模様を描かれた、名物裂で言うところの“作り土”の表現は、ともすれば見落としてしまうところだったかも知れない。そこに徳永氏のご研究の広さが現れている。もう一つ深い興味を持ったのは、首抜きに大きく菊花を置いた御所被衣(ごしょかつぎ)模様による見事な刺し被衣で、藩公と京都との深いかかわりによるものであろうか。しかし、この模様が産着にまで使われているところに、徳永氏は旭の生命力を感じられたに違いない。“東北の女性たちが、生に対する身構えを、自分とともに衰えてゆく古布に託し、糸と模様の刺し綴りで表現し

て、これを着ることにより共生をした。人間を育て、生の喜びを育てたのが人間の仕事である”という徳永氏の深い洞察に、刺し物に対する研究を包括している哲学を学んだ。

和洋女子大学 鷹司 綸子

酒井美智代さん、日本民芸館展入賞 “おめでとう”

会津若松市で開催された第2回夏期セミナーで講演や「糸を績む」実演をしていただいた酒井美智代氏の意欲的作品「苧編み袋」が、2001年度日本民芸館展で入賞された。氏は毎年、精力的に新しい造形作品に挑戦され、民芸館展はじめいろいろな作品展に出品されている。氏はまた「手織り通信」を自分ひとりで行き、発行し、昭和村での日々やもの造りに対する姿勢などを四季折々の風物と織り混ぜて通信に述べられている。

相模女子大学 永井 房子



入賞作品「苧編み袋」

*****お知らせ*****

★ 服飾文化学会 平成14年度総会・大会校決定

期日 平成14年5月18日(土)、19日(日)

会場 実践女子大学 香雪記念館

東京都日野市大坂上 4-1-1

中央線日野駅下車 徒歩約12分

内容 見学会・研究発表・特別講演・懇親会
(学内食堂)

★ 夏期セミナーのお知らせ

平成14年8月1日(木)~3日(土)の日程で服

飾文化学会第3回夏期セミナーの計画を進めています。本年度は当学会理事である徳永幾久氏のご協力を得て「庄内地方の服飾文化」をテーマに、長年の研究成果のご講演と収集された膨大な資料をもとに解説をしていただく予定です。またこの機会に酒田、鶴岡の美術館、資料館、博物館を訪ねます。この地域の生活文化と服飾の関係を理解し、これからの服飾研究への契機になることを願っています。多くの方々の参加を期待しています。計画案の概略は次の通りです。

- 8月1日(木) 午後1時、山形市婦人センター
講演と資料解説：徳永 幾久氏
講演後、酒田市に移動
- 8月2日(金) 午前、本間美術館：講演と見学
午後、本間家旧本邸、山居倉庫及
び庄内米歴史資料館、酒田市立
資料館などの見学
懇親会
- 8月3日(土) 午前、鶴岡市、致道博物館：講演
と見学
午後、羽黒山神社経由で山形市
へ、4時30分頃解散

★ 学会誌の刊行と次号投稿について

- ・「服飾文化学会誌」第2号は、予定通り、2002年2月末日に刊行されました。今後の発展のために、ご意見ご感想をお寄せ下さいますよう、お願いいたします。
- ・随時、多数の投稿原稿をお待ちしていますので、なるべくお早目にお送り下さい。
- ・第3号の申込および投稿締切日は、先号よりも1ヶ月程度早くなる可能性があります。追ってご通知いたします。
- ・投稿カードは、創刊号に綴じ込まれていますが、ご入用の方は事務局にご請求下さい。

(編集担当)

★会費納入のお願い

平成14年度の服飾文化学会会費6,000円を5月中に同封の振込用紙にてお振込み下さい。過年度未納の方もよろしくごお願い致します。会費に関するお問い合わせは下記にごお願い致します。

〒102-8357 東京都千代田区三番町12

大妻女子大学第三意匠学研究室

服飾文化学会事務局

TEL 03-5275-6029 FAX 03-3261-8119

★講読会員

高知女子大学附属図書館

杉野女子大学附属図書館

東京家政学院大学附属図書館

東京服飾造形短期大学附属図書館

武蔵野美術大学美術資料図書館

*****編集後記*****

未来への期待をもって幕開けした本年は世界的事件があり、様々なことを考えさせられました。

先人の積み重ねてきた生活文化を振り返る機会にしたいとおもっています。

本号には当学会の13年度夏期セミナー以降の活動状況が紹介されています。いろいろな催しに一人でも多くの会員の方々が参加され、私たちを取り巻く服飾文化について相互の理解を持てればと願っています。

酒井氏手作りの「手織り通信」は、今日のIT時代にもかかわらず人の温もりを感じさせ、毎号が楽しいものです。

(事務局)